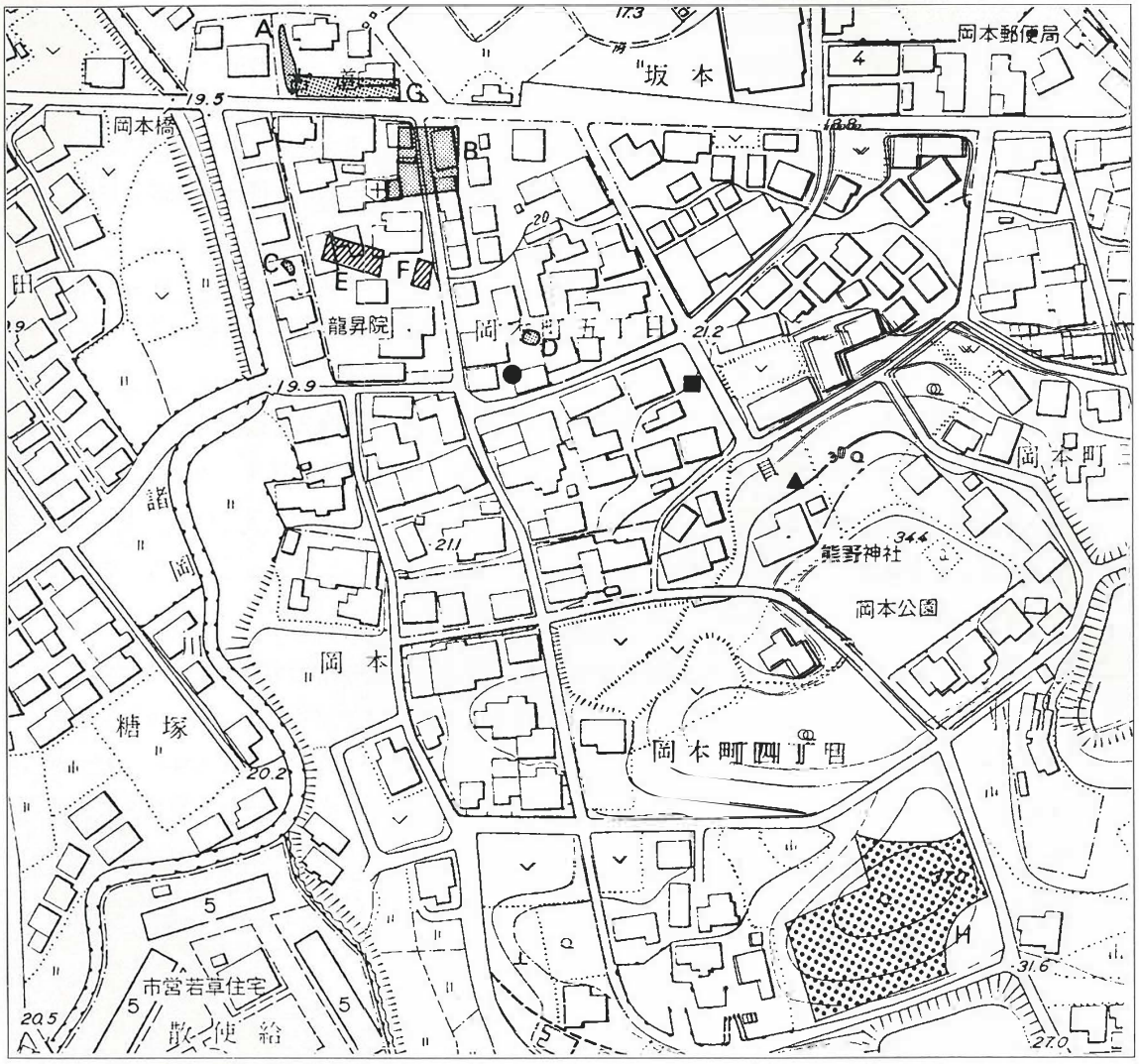
福岡県文化財調査報告書第55集

須玖・岡本遺跡

福岡県春日市岡本町所在遺跡の調査概要

1980

福岡県教育委員会



A・B・C・D（昭和4年，京都帝国大学発掘調査地点）
G（昭和54年，福岡県教育委員会発掘調査地点）
H（昭和54年，春日市教育委員会発掘調査地点）
E・F（昭和37年，九州大学・福岡県教育委員会発掘調査地点）

● 本来の支石墓所在地
■ 支石墓旧所在地（京都帝国大学発掘当時）
▲ 支石墓現所在地

第1図　遺跡周辺地形図（昭和54年現在）

序

本報告書は，県道大野・二丈線の拡幅工事にともない，昭和54年４月に実施した埋蔵文化財発掘調査の記録であります。春日市は那国の中心地に比定されておりまして，原始・古代の歴史を解明するうえにも重要な所であります。

ここに調査の成果をまとめ，報告書の刊行に至った次第であります。

本報告書の刊行にあたり文化財への関心が深められ，活用されますことを願ってやみません。

昭和54年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　浦山太郎

例　言

1．本報告書は，福岡県教育委員会が県道大野・二丈線の拡幅工事に伴い，県道路建設課から執行委任を受けて昭和54年４月２日～４月12日にかけて実施した須玖・岡本遺跡の緊急発掘調査の概要である。

2．本書に掲載した図・遺構写真は，宮小路賀宏・木下修・佐々木隆彦・草場敬一があたり、製図は佐々木・平田春美が分担した。　遺物写真は，九州歴史資料館の石丸洋，平島美代子氏，整理は岩瀬正信氏にお願いした。

3．本書の執筆は，IIを宮小路がその他は佐々木が分担し，編集は佐々木が担当した。

本文目次

頁

I．遺跡の位置と環境……2

II．調査に至る経過……3

III．調査の概要……3

IV．遺構と遺物……5

V．おわりに……6

I．遺跡の位置と環境

本遺跡は観音山から派生する春日丘陵の北端に位置し，福岡県春日市岡本町739－1番地に所在する。　当丘陵は，弥生時代の遺跡群が密集する丘陵として著名な所である。丘陵の東側裾部には，御笠川に合流する諸岡川が南北に蛇行しながら静流する。

当該地は，古くは明治32年に支石墓が発見され，前漢鏡30数面・細形銅剣・銅才・銅矛・ガラス璧・勾玉・管玉等が出土した須玖・岡本遺跡の一群で，支石墓所在地から110米北側の丘陵の突端に所在する。当遺跡一帯は，弥生時代の墓地群，とりわけ大規模甕棺墓群として早くから知られており，昭和４年に初めて京都大学による学術的なメスが入れられ，続いて昭和37(註1)

年には九州大学・福岡県教育委員会の合同調査が実施され多大の成果を納めた遺跡である。

さらに，当地点は京都大学発掘A地点と称される(註2)箇所と一部重複し，調査のトレンチを確認するに至った。

註1　京都帝国大学文学部考古学研究報告　第11冊「筑前須玖史前遺跡の研究」－1929年

註2　福岡県教育委員会「福岡県須玖・岡本遺跡調査概報」－1963年

II. 調査に至る経過

須玖・岡本遺跡の所在する丘陵の北端を東西に通過する県道（大野・二丈線）は，近年とみに交通量が増大し，これの拡幅が必要となった。道路は，北側に幅6mを拡幅する計画となり，これの予備調査は春日市教育委員会で実施され，丸山康晴・平田定幸が調査に当った。昭和54年3月19・20日の予備調査によって、昭和4年に京都帝国大学が実施した発掘調査のA地点の確認と，その東側において甕棺墓群を確認した。　調査を必要とする範囲は，幅6m×15mの小面積であるが，当該調査対象地区の北側にも遺跡は拡大するものと考えられる。なお，南側はさきの京都帝国大学が実施した調査のB地点であり，10基の甕棺墓が発見されている。

今回の発掘調査の端緒となるものが，県道拡幅工事であることから，急拠発掘調査も県事業に切り替え，昭和54年4月2日から12日までの10日間で調査を実施した。

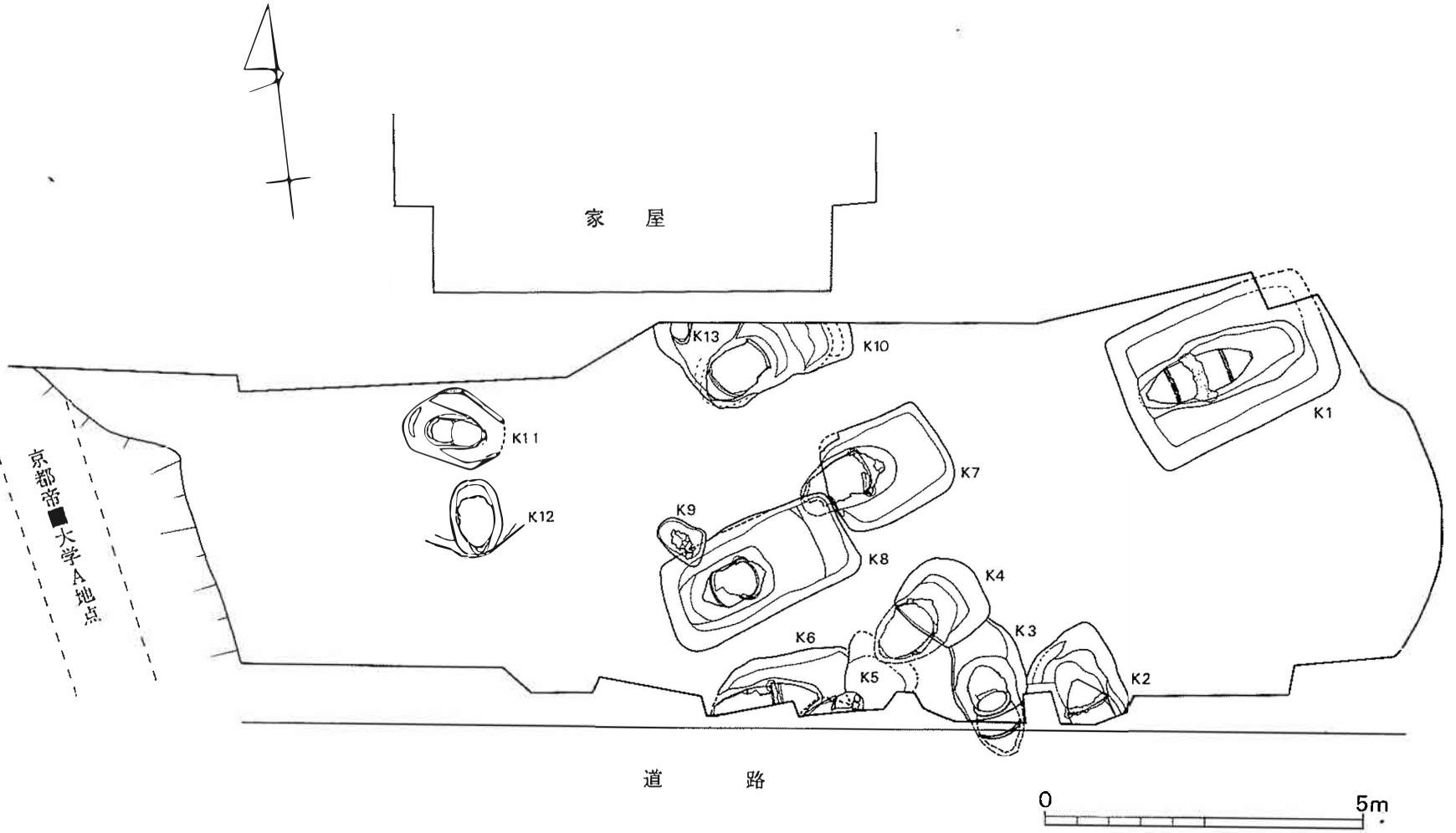
調査は，福岡県教育委員会が主催し，文化課が担当した。現地調査には調査第一係長宮小路賀宏と技師佐々木隆彦を派遣し，庶務係主任主事大神新が経理を担当した。

なお，調査には春日市教育委員会社会教育課の協力を受けるとともに，山口大学文学部近藤喬一助教授の助言を得た。当該遺跡の調査は今回で3次目である。弥生時代の極めて重要な遺跡であるがその一部が明らかになったにすぎない。今後とも注意深く遺跡の全容を究明する必要がある。

III. 調査の概要

調査は新規に拡幅する部分から着手し，ほぼ90㎡を対象とした。遺構検出の結果，13基の甕棺墓を検出した。内訳は成人棺墓10基，小児棺墓3基である。発掘地点は，旧地形図で見る限りでは，本来の丘陵幅が60m近くあり現在では2/3近くが削平を受けている。13基の甕棺墓は殆んど丘陵尾根線付近に集中して埋葬されており，甕棺の主軸は尾根線に対して平行乃至直行している。さらに当該地は著しく削平されており，小児棺の遺存状態が頗る悪いことから，小児棺の総数は増加すると思われる。個別甕棺墓では1号甕棺墓が一群から離れて埋葬され，墓壙規模も大きく深い。7号と8号は甕棺を埋置する穴を掘削した際に墓壙の床面を灰白色の粘土で穴の斜面にほぼ平行になるように埋土している。これが何を意味するかは明らかでない。さらに，8号は竪穴を掘り甕棺を傾斜させているが横穴を掘っておらず，これに後出する甕棺墓の過渡的形態であろう。

また，調査区は住宅地であることから甕棺墓は総体的に攪乱が著しく，棺内の遺物は皆無である。



第2図　岡本遺跡遺構配置図(1/100)

Ⅳ. 遺構と遺物

No.	墓壙規模	墓壙形態	傾斜角度	合口形式	器種	主軸方位	時期	備考	甕棺観察表
1	長軸×短軸 3.39×2.31	長方形	−5°	接口式	甕＋甕	N74° E	中期前葉	二段掘りの墓壙目貼りは上部のみ	上甕－内側に突出する口縁部。外傾する平坦部。最大径は口縁部。胴下半に「M」字凸帯。底部は上底。内外面ナデ。黒斑は胴部上面と口縁端部黒塗りはロ縁端部。風化著しい。下甕－上甕と同タイプであるが、口縁部「T」字状で内側は断り曲げ。粘土・焼成とも上甕より良好。黒斑は口縁端部。底部近くと胴部等間隔に小さなもの。
2	不明	不明	不明	接口式	鉢＋甕	N21° W	中期前葉	3号に切られている。目貼りは上部のみ。半掘	上甕－「T」字状の口縁の下に三角貼付凸帯。黒斑は内外面底部。無塗りは口縁端部。砂粒少なく焼成・粘土とも良好。赤褐色。丁寧に焼いたもの。黒斑は特徴有。下甕－内側に強く突出する口縁部。凸帯は「T」字状で、風化著しい。粘土・焼成とも良く、赤褐色
3	−×1.15	不整長方形	+36°	接口式	甕＋甕	N17° W	中期後半	上甕は口縁下打欠き、4号に切られている。下甕は道路下。目貼りはない。	上甕－口縁部不明で頸部は内傾する。胴部に「コ」字凸帯。底部は平底。外面凸帯下は荒いハケで他はナデ。黒斑は対称位置にあり、一方は大きい。塗りは風化著しい。打ち欠き部が下甕内にあり。下甕－内傾する逆「L」字状口縁で口縁下に台形凸帯。胴部に2条凸帯。胴部上半に最大径。底部は平底。塗りはなく、黒斑は一方向に著しい。大粒砂粒含み淡灰色を呈し他と異る。凸帯上半は荒いハケ。
4	1.25×1.36	不整方形	+26°	接口式	丹壺×甕	N44° E	中期後半	上甕は壺の打ち欠き。二段掘りの墓壙	上甕－胴部上半に2条凸帯。張りのある胴部に細味の底部。凸帯上部接合部での打欠き。凸帯下まで丹塗り研磨で以下はナデ。内面は非常に細いハケとナデ。精製された土器で、丹を地布する際に内側に散っている。下甕－内傾する逆「L」字状口縁で口縁下部の凸帯は貼付けていない。胴部上半に最大径。胴部は2条凸帯。調整はナデと凸帯下部に荒いハケ痕。黒斑は対称位置に大きくあり、黒塗りはない。良質の土器で淡赤褐色を呈す。
5	不明	不整形	不明	接口式	甕＋甕	N62° E	中期後半	半掘、4号に切られている目貼り粘土有り	上甕－上半部欠損。胴部に発達した三角形に近い凸帯。風化著し。外面調整不明。内面荒いハケとナデ。焼成良好で淡赤褐色。下甕－逆「L」字の内傾する口縁。口縁部に角凸帯。胴部に2条の発達した三角形に近い凸帯。黒斑は一方向に大きく認められ、黒塗りはない。外面荒いハケ、内面ナデ。硬質良好で淡赤褐色。
6	不明	隅丸長方形	−6°	接口式	甕＋甕	N87° E	中期前葉	5号に切られている。攪乱が著しい。上甕は打ち欠き半掘。目貼り有り	上甕－「M」字凸帯上部で打ち欠き。外面細いハケの後ナデ。内面非常に細いハケ状のナデ。黒塗りは外面のみ。黒斑は2箇所で一方は大きい。大粒砂粒を含み、焼成硬質。風化著しい。下甕－「T」字状の未発達の口縁部を有す。頸部は若干内傾し胴部上半に「M」字状凸帯。底部を欠く。内面上部は非常に細いハケ状のナデで他はナデ。黒斑は凸帯上部に強く、下部と口縁部にあり。それと直角方向に僅かにある。
7	1.95×1.63	隅丸長方形	+25°	接口式	鉢＋甕	N74° E	中期中葉	墓壙の床面を灰白色粘土で埋める。目貼り有	上甕－「T」字状に発達した口縁部。口縁直下に1条凸帯。底部若干上底。内外面に黒塗り。黒斑は対称位置にあり。内外面ナデ。良質土器で淡赤褐色。下甕－内側に強く発達した口縁部。頸部は外傾し胴下部に「M」字状の貼付凸帯。底部に凹線有り。黒塗りは内外面に有り。外面は化粧土の上から黒塗り。胴上半に特に焼成著しい箇所有り。凸帯を貼付ける前に1条の沈線を廻らしている。黒斑は4箇所に対称にある。淡赤褐色、風化している。
8	3.05×1.53	隅丸長方形	+40°	接口式	鉢＋甕	N71° E	中期中葉	二段掘りの墓壙床面に甕棺を埋置する竪穴を掘り、その土で床面を埋土する。目貼り粘土有り	上甕－「T」字状の未発達の口縁部。口縁下に貼付三角凸帯。底部は上底で黒斑は底部近くのみ。黒塗りは口縁平坦部のみ。内外面ナデで器外面風化。良質で赤褐色強い。下甕－「T」字状に発達した口縁。口縁直下に1条の凸帯。胴中央に「M」字凸帯。底部近くは細くスマートで上底。外面ナデで内面中央部に非常に細いハケ状のナデ。黒斑は底部と上半部に有る。黒塗りは内面と口縁平坦部。粘土に金雲母。硬質良好で淡赤褐色。
9	0.85×0.50	不整形	不明	不明	不明	N33° W	不明	8号を切っている。小児用甕棺墓。削平著しく不明瞭	小破片のみ残存
10	不明	楕円形	+26°	—	車棺	N54° E	中期後半	家屋建設のため完掘してない。木蓋であろう。三段掘の墓壙	逆「L」字状口縁。平坦部は幅。口縁下に1条の台形凸帯。頸部は僅かに内傾。胴部下半に2条の台形凸帯。底部は上底。他の同時期の甕と若干形状異る。粘土に大粒砂粒含む。風化著しく調整不明。黒斑箇所で一方向が大きい。黒塗り無。外面上部に斜行した細い沈線が認められる。
11	1.60×1.20	不整楕円形	+26°	挿入式	丹樽＋甕	N78° W	後期初頭	一部攪乱。三段掘の墓壙、小児用甕棺墓	上甕－断面樽形土器で口縁を内傾させ直下に発達した1条凸帯を有す。胴部は張り、底部は上底で製作時に破損したため補修し未調整である。口縁・凸帯下は非常に細いハケ状のナデ。外面丹塗り研磨。内面は非常に荒い掻板のものでかきとった後ナデ。内面には丹が散布する。黒斑は底部のみ。下甕－「く」字に外反する口縁。頸部に貼付三角凸帯。最大径胴部上半で底部は上底。粘土は赤色粒子多い。黒斑底部に有り風化著しく調整不明。
12	不明	不明	+25°	不明	甕＋甕	N40° W	中期末	攪乱著しい。上甕は下甕内で検出	上甕－逆「く」字に外反す。口縁で端部は凹線を呈す。口縁直下は貼付三角凸帯。口縁内側は明瞭な段。胴部以下欠損。外面荒いハケ、内面ナデ、金雲母含み赤褐色を呈す。3号下甕と粘土似る。下甕－胴部上半欠損。胴部に大い台形状の1条2条の貼付凸帯。黒斑は一方に大きく付く。黒塗りは内側。外面荒いハケ、内面ナデ。硬質良好で赤褐色。
13	—	—	—	—	—	—	—	小児棺で家屋建設のため一部確認したのみ	不明

V．おわりに

須玖・岡本遺跡は，明治末期から大正初期にかけて，八木奨三郎・中山平次郎・浜田耕作諸博士らによって踏査がなされ，次いで昭和４年に森本六爾によって踏査と若干の発掘調査が行われている。同年９月には京都帝国大学の本格的な学術調査が実施され，総数11基の甕棺墓が検出された。新しくは昭和37年10月に県事業として調査が行なわれ，19基の甕棺墓と３基の土壙墓が確認されている。(註１) 前者の調査では細形銅剣１，後者では細形銅剣，細形銅戈各１が出土している。(註２) 今度の発掘地点は，明治35年に道路改修工事で掘削された道路を挟んで京都帝国大学が調査したＢ地点の北側に位置しており，調査の成果が期待された。結果は13基の甕棺墓を検出したが，古い時期のもので中期前葉（橋口氏の編年によるＫＩＩｃ式），新しい時期では後期初頭(同ＫⅣａ式)のものが認められた。昭和37年の調査によると15号甕棺墓の墓壙規模は他と比較して一段と大きく細形銅剣を副葬しており，後出する時期の13号・14号甕棺墓と３号土壙墓と一連の時期の墓に副葬品が見受けられ，一定の場所に集中して出土することは，中枢をなす血縁的な墓壙として設定されたことを窺わせる。(註３) 今度の調査地点では，狭い調査区域であることもさることながら，支石墓に近い場所＝優位な場所，から離脱した墓域の北限であることから，副葬品を伴う一群の墓域として設定されないグループであることが考慮される。(註４)

さらに発掘区西隅で京都帝国大学発掘調査Ａ地点に相当すると思われる箇所を確認した。京都帝国大学の調査によると，「台地の広さ東西約四十間南北約十五間。…西側は徐々に平夷せられて稍々広い畑地をなし，約四尺の低い切取りを作っている。而かも我々は此の断層線の中央から少し南方に方る一地点に於いて，特に多数の土器が地表下三尺乃至五尺前後の所に存在する…。」とあり，丹塗り土器が多数出土していることから，甕棺墓の周辺には祭祀に関する遺構の存在を窺わせる資料である。(註５) さらに，昭和54年に春日市教委による岡本４丁目の甕棺墓の調査がなされ，多数の甕棺墓が確認されており，小型銅鐸の鋳型を出土したことで脚光を浴びた遺跡であるが，支石墓を中核とする墓地群とは異った一群を形成しているものであろう。(註６)

現在では須玖・岡本遺跡周辺は，福岡都市圏のベットタウンとして家屋建設が著しく，遺跡の面影は失われつつあり，僅の空間を残しつつも遺跡全体の把握がなされていない現状では，文化財保護行政の立場から，さらには重要遺跡の管理策定の面からも早急な対策を講じる必要があろう。

註１　京都帝国大学文学部考古学研究報告第11冊「筑前須玖史前遺跡の研究」－1929年

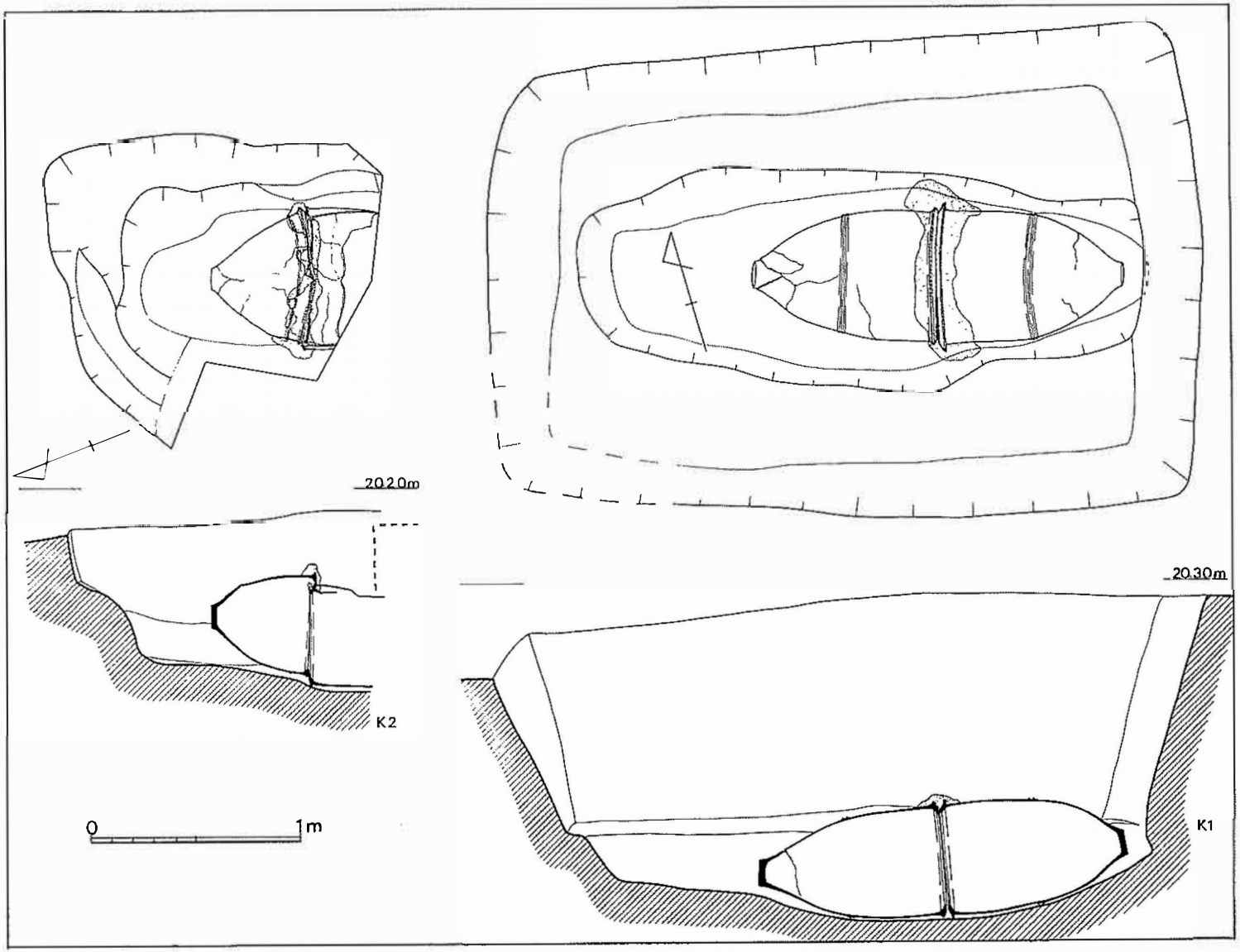
註２　福岡県教育委員会「須玖岡本遺跡調査概報」－1963年

註３　福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告（ＸＸＸＩ）中巻」－1979年

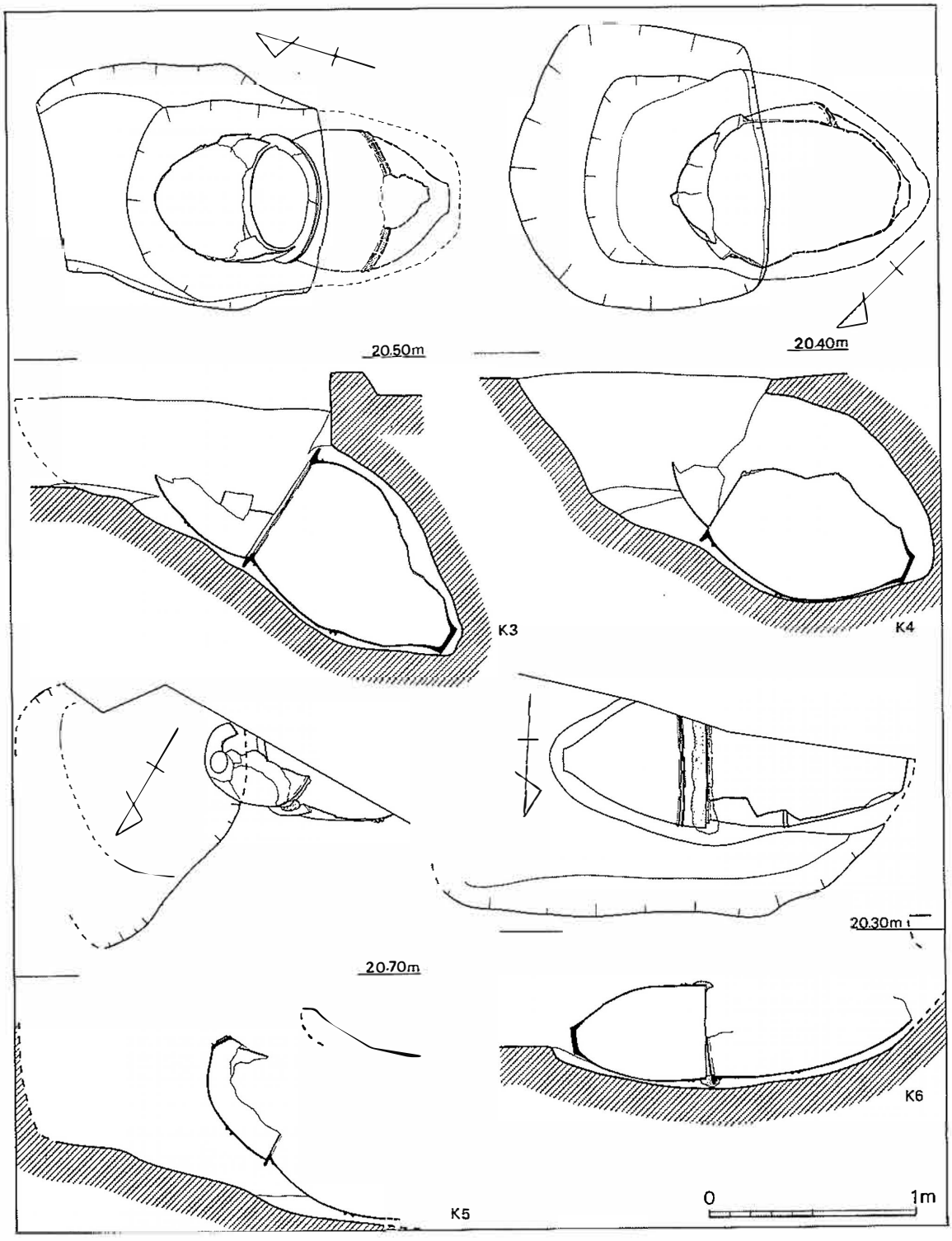
註４　註２と同じ，13号から細形銅戈１，14号からガラス小玉38個，15号から細形銅剣１，３号土壙墓からは鉄刀，銅釧３，ガラス勾玉１が出土している。

註５　註１と同じ。

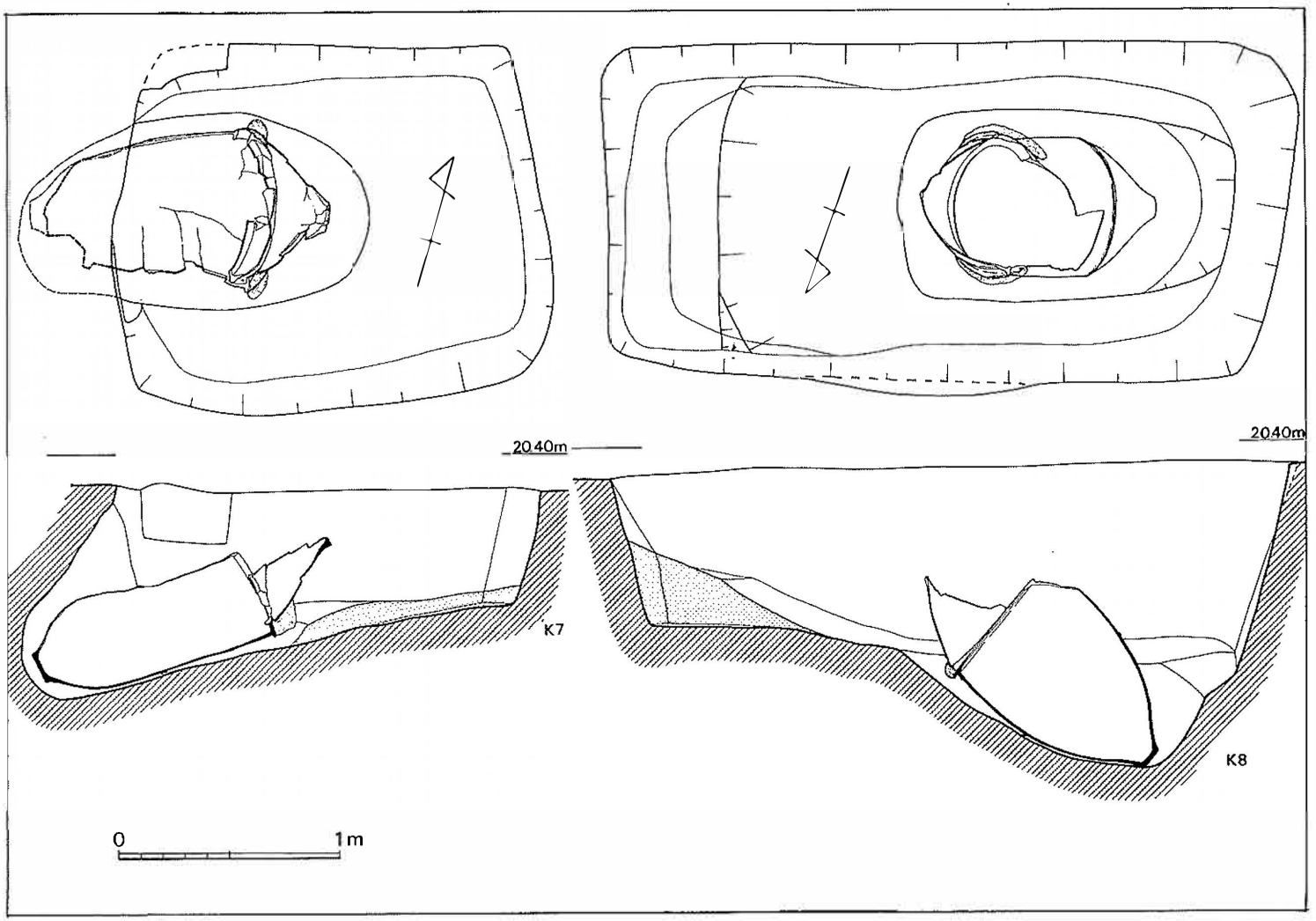
註６　考古学発掘二題「小銅鐸の鋳型と石鍋工場跡（九州）」アサヒグラフ1979，7-13



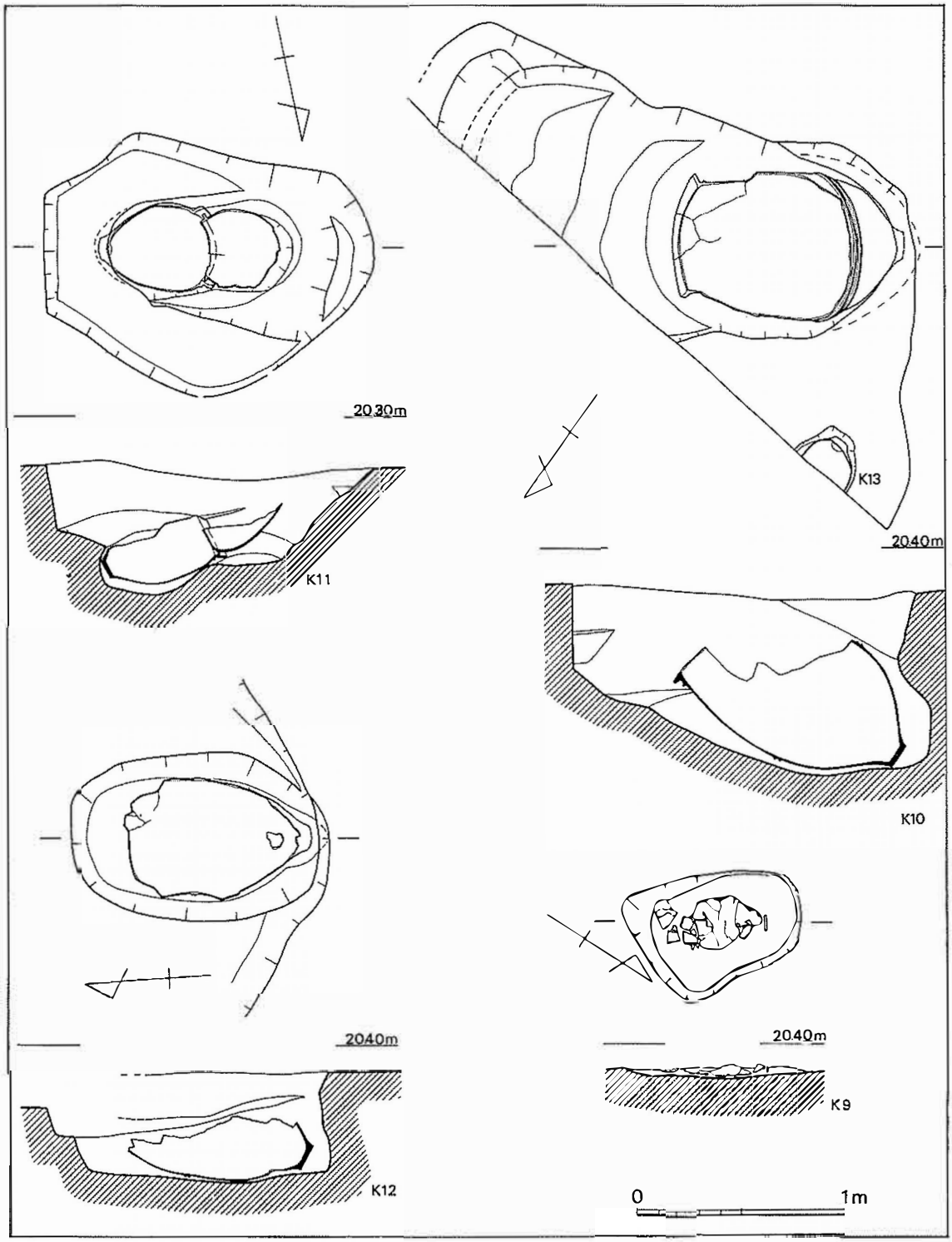
第3図　1号・2号甕棺墓実測図（1/30）



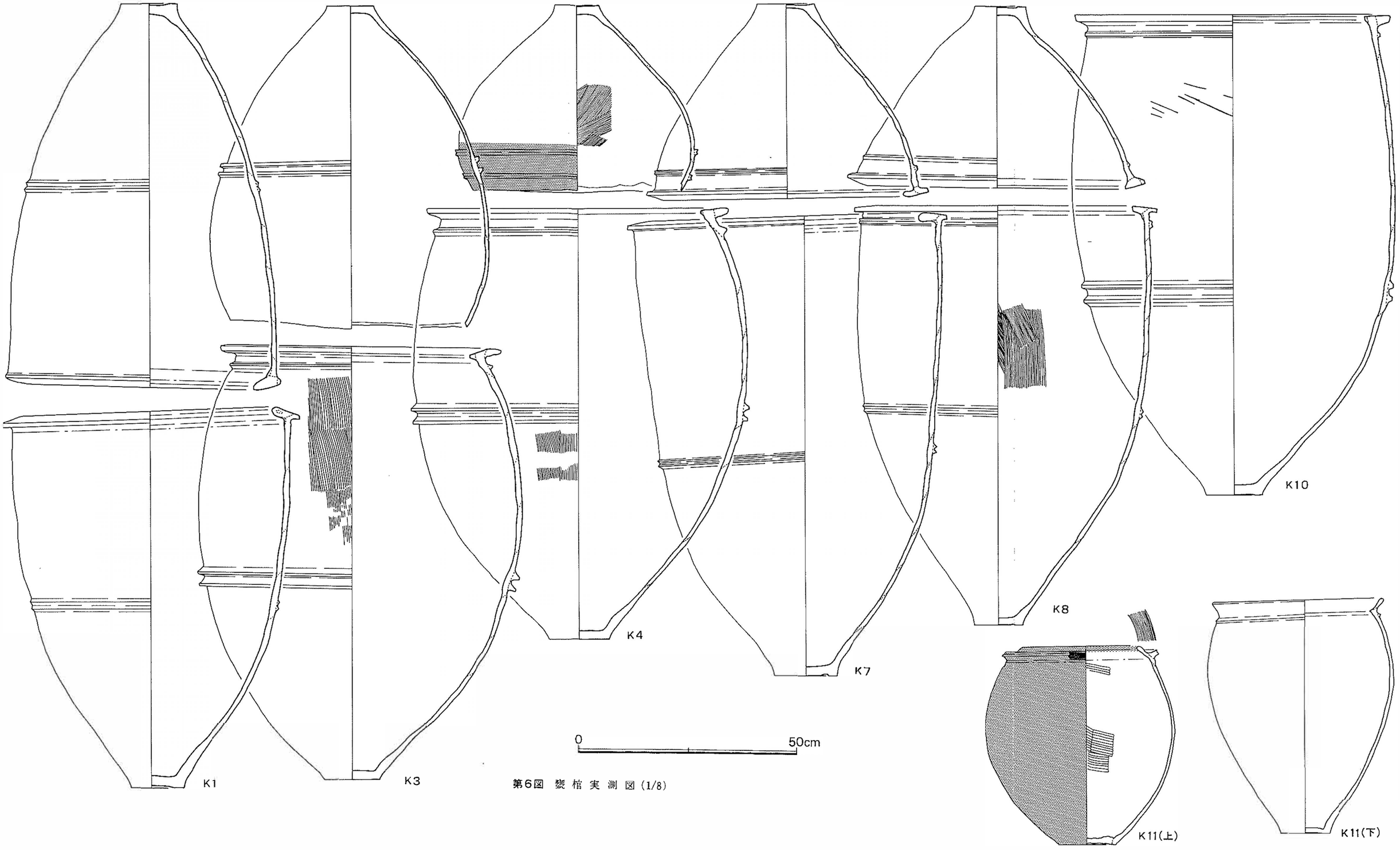
第4図　3号・4号・5号・6号甕棺墓実測図（1/30）



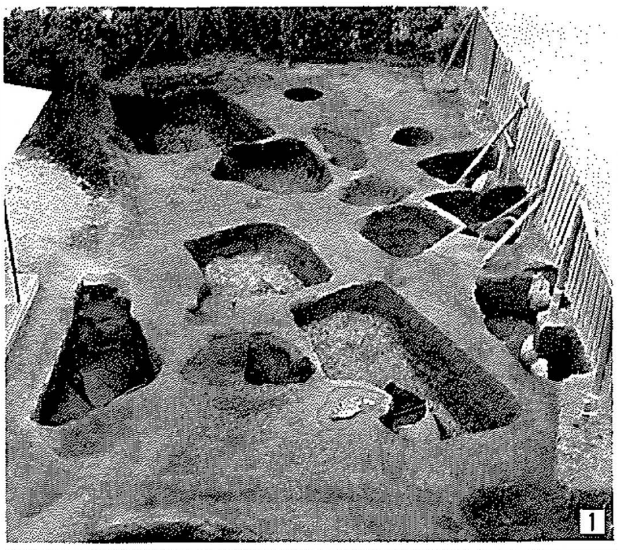
第5図　7号・8号甕棺墓実測図 (1/30)



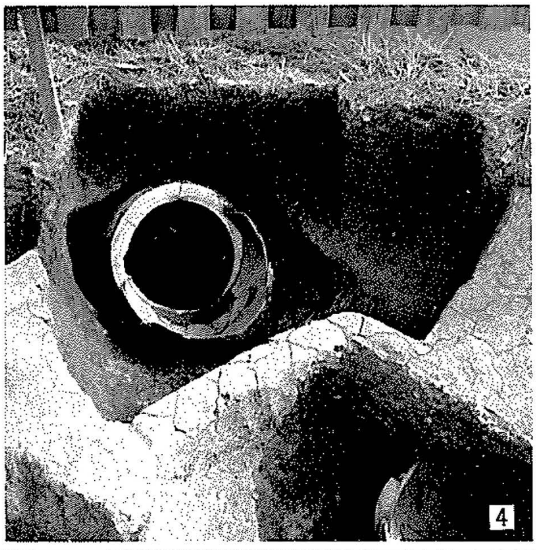
第6図　9号・10号・11号・12号・13号甕棺墓実測図（1/30）



第6図　甕棺実測図(1/8)

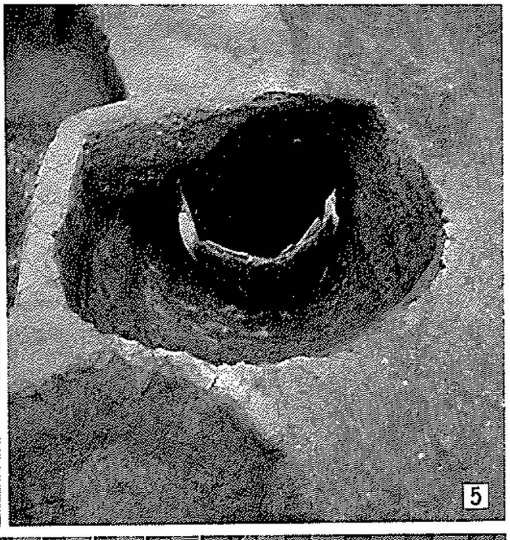


1

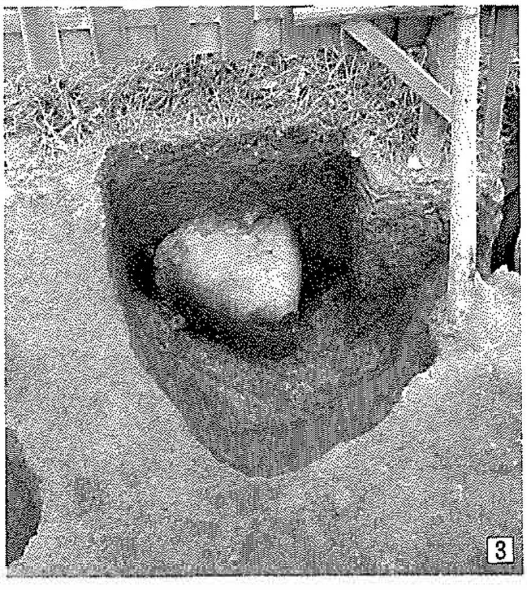


4

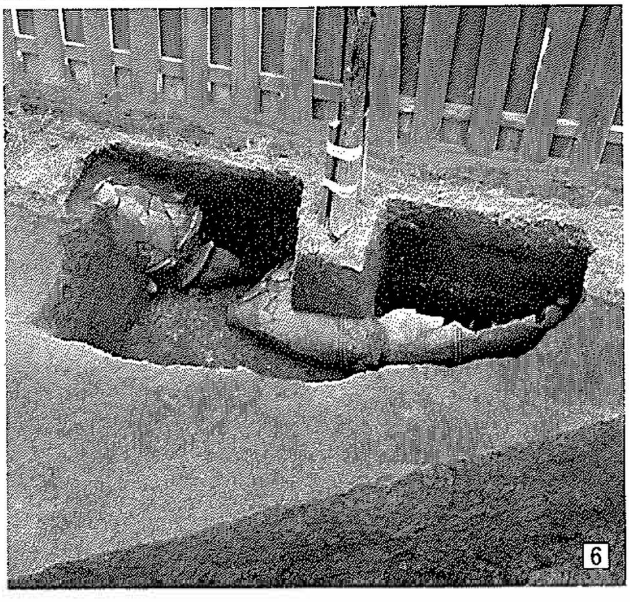
2



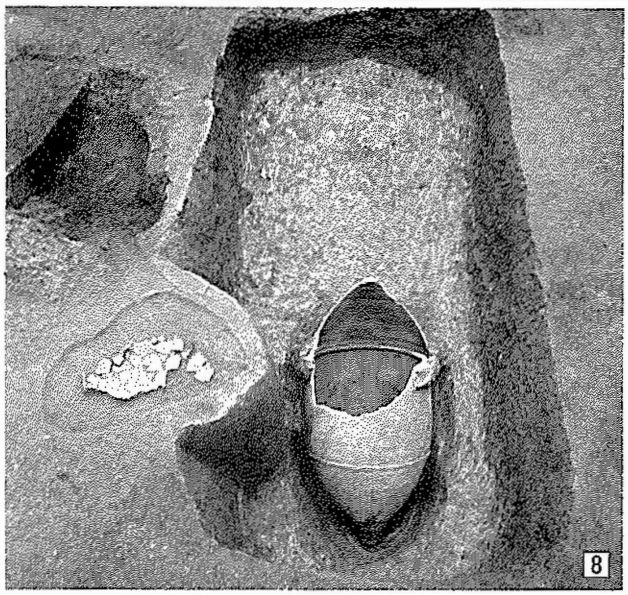
5

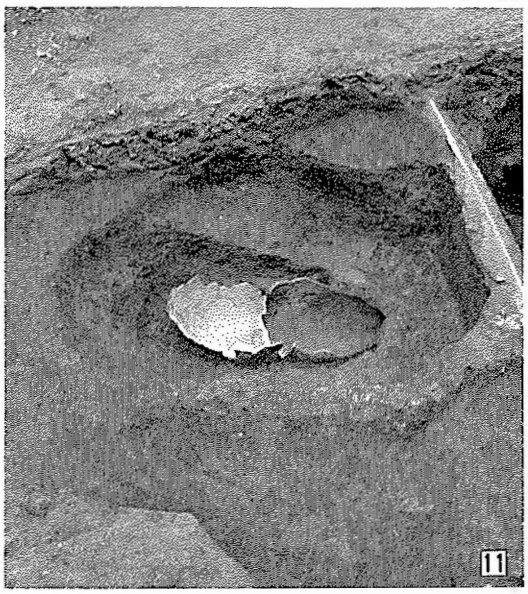


3

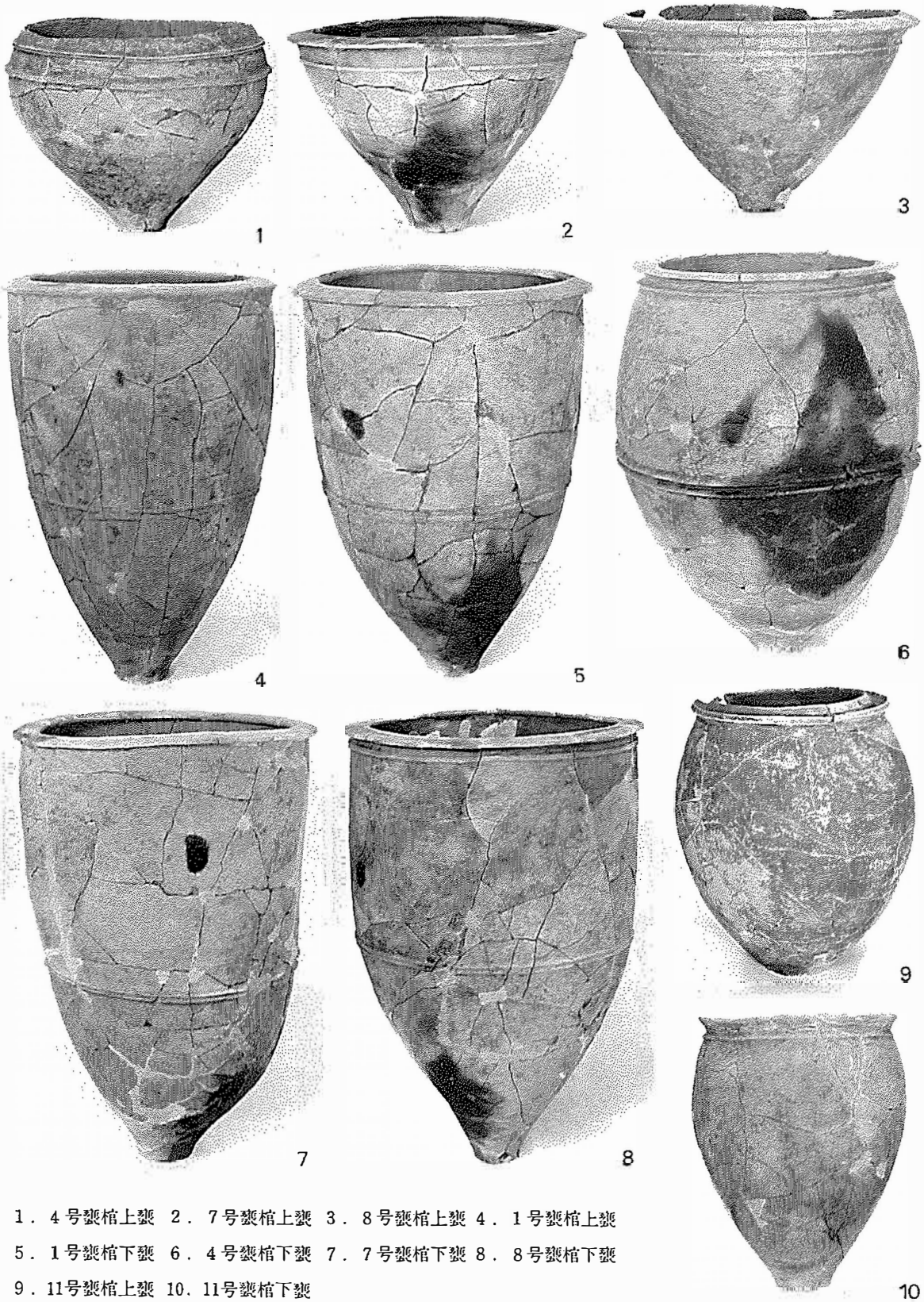


6

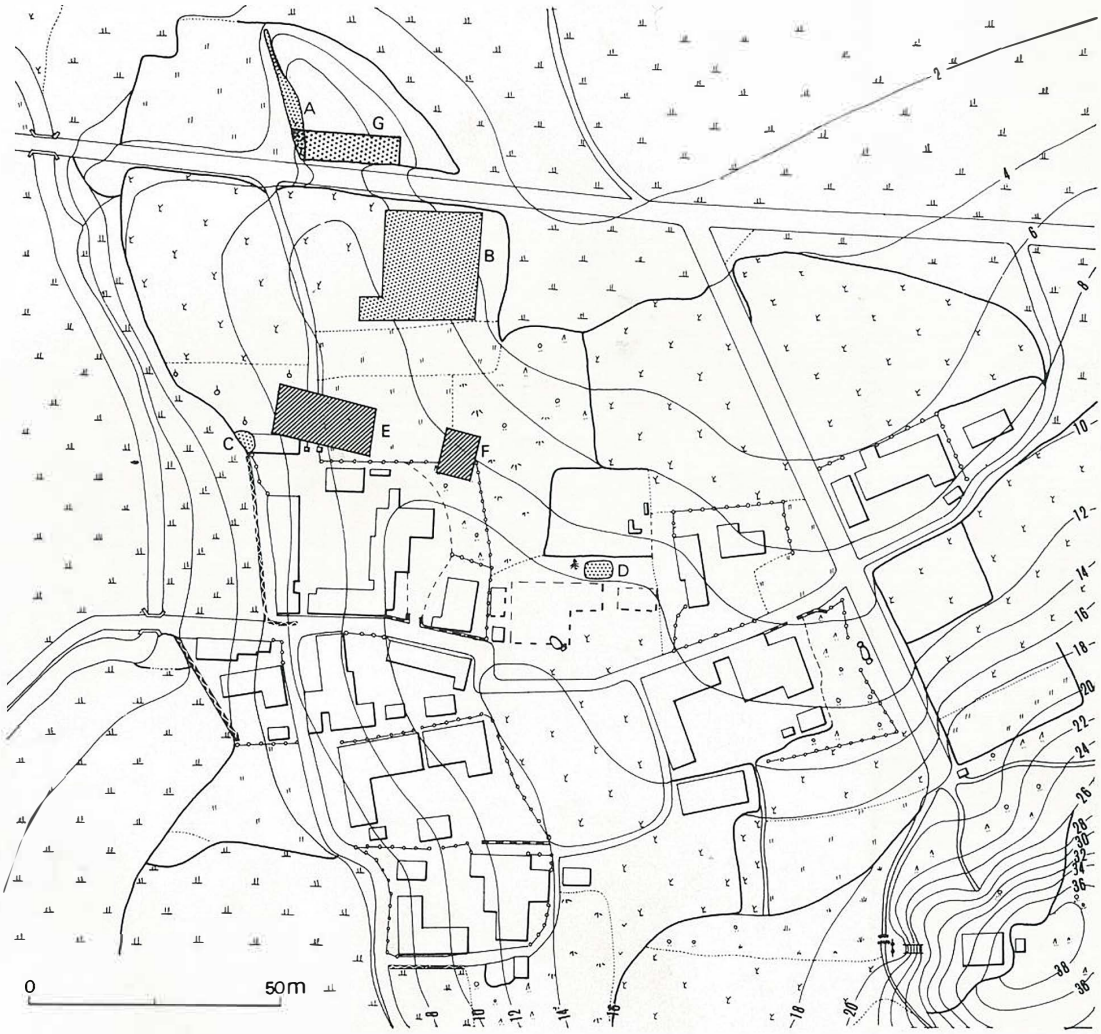




1．遺跡全景(西から)
2．1号甕棺墓(南から)
3．2号甕棺墓(北から)
4．3号甕棺墓(北から)
5．4号甕棺墓(東から)
6．5号・6号甕棺墓(北から)
7．7号甕棺墓(東から)
8．8号・9号甕棺墓(西から)
9．10号・13号甕棺墓(西から)
10．12号甕棺墓(西から)
11．11号甕棺墓(南から)



1．4号甕棺上甕　2．7号甕棺上甕　3．8号甕棺上甕　4．1号甕棺上甕
5．1号甕棺下甕　6．4号甕棺下甕　7．7号甕棺下甕　8．8号甕棺下甕
9．11号甕棺上甕　10．11号甕棺下甕



A・B・C・D地点（京都帝国大学発掘調査）　E・F地点（九州大学・福岡県教育委員会発掘調査）
G地点（福岡県教育委員会発掘調査）

第7図　遺跡周辺地形図(昭和4年9月)（筑前須玖史前遺跡の研究 京都大学研究報告第11冊より）

須玖・岡本遺跡
福岡県文化財調査報告書　第55集

昭和55年3月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6－29

印　刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号